

# ワーズワス「ルーシー詩群」管見

## 河村 民部

これまでに幾つかのワーズワス（William Wordsworth, 1770-1850）に関する拙論の中で筆者は、「ルーシー詩群」（Lucy Poems）については、＜時と永遠＞の観点から論じたことがある。その論点の中心は、ルーシーの早世の理由として、ワーズワスが子どもを永遠化するために、その成長を停止させ、生まれ出てきた自然に返すことで、今度は自然を子どものエンブレムとして成立させて、永遠化を図るというトリックを強調したことである。なぜなら自然は総じて人間とは違って永遠の存在であると見做しうるからだ、他方人間は滅びの象徴である「時」の中に在って、必然的に成長するからであり、成長することは滅びに到ることを意味するからである、と論じた。だが小さな子どもでも「時」の脅威を内包した存在であり、滅びの萌芽の持ち主であるから、ワーズワスは、永遠の存在を、ついには子どもは子どもでも、生まれたての赤ん坊にまで極限し、それでも不足であるかのように、その赤ん坊をも死に至らしめて、自然に帰してしまうということを屢々やってのけたとも述べた。それほどワーズワスにとっては、滅びを齎す「時」への脅威と嫌悪、そしてそれからの脱却が彼の詩の本質的命題であったからである。

筆者は数年前に『ワーズワス <sup>リリカル・バラッズ</sup>『抒情民謡集』再読』という批評書を出版（英宝社、2014）したことがある。その時には、この詩集の中核となるいわ

ゆる「ルーシー詩群」については、特に言及を避けた。それは上記のような「ルーシー詩群」に関するある意味で完了した持説があったからであり、それに付け加えるべきものは、殆んど持ち合わせていなかったからである。

ところが、今回はふとしたことから、Marian Veevers の新著 *Jane & Dorothy: A Tale of Sense and Sensibility* (Sandstone Press, 2017) を入手し、それを読んで、深く感じるところがあったので、このエッセイを書いておくことにしたのである。「ふとしたことから」とは、筆者が今は忘れ去られた文人セオドア・ワッツ＝ダントン (Theodore Watts-Dunton) の復活をめぐって、イギリスの The National Archives に自分の名を登録してあるので、定期的にそこから送られてくる情報の中に、最新刊のヴィーヴァーズさんのこの本があったのである。題名と短い紹介文に吊られて、これは面白そうだという直感が働いて (筆者にはこのような嗅覚が時折作用する癖がある) 早速注文して、これを入手し読んでみた。すると驚くべきことが書いてあった。

本書は、18 世紀後半のいわゆるジョージア朝に生まれ育った二人の女性ジェーン・オースティン (Jane Austen, 1775-1817) とドロシー・ワーズワス (Dorothy Wordsworth, 1771-1855) が、その家父長制の社会の中で如何にしてジェーンの言う「分別」(sense) と「感情」(sensibility) をそれぞれの武器として、己の信念を貫き、独身女性としての生涯を生きたかを対比的に論じたものである。二人の女性とも、彼女らが属する社会的地位は、疑似紳士淑女の中産階級という所で、いずれの家も貧しくて、このような家に在っては、女の義務と言え、個人の好悪などに頓着せず、お金持ちの夫を見つけて結婚し、家を援助することが最大のものであった。これができないで独身者として暮らす羽目になると、父の遺産には<sup>あずか</sup>与れなくて、兄弟の恩恵に縋って生きることを余儀なくされたのである。こうした女性が働いて自立することを許容しうような社会体制ではなかったからだ。

ジェーンは家の家事手伝いや、兄弟が結婚して子どもができればそれらの甥姪の世話に駆り出され、各地を転々と放浪しながら、手の空いた時に狭い化粧室に閉じ困ってせせと執筆に専念した。しかもそれを出版するといった当てもなくである。生まれたスティーヴントン (Steventon) の牧

師館に愛着を感じてそこに定住していた頃はよかったが、兄に唆されて、父母はジェーンの意志には関係なくこの牧師館を立ち退き、バース（Bath）に移住した。バースではジェーンは、失意の余り、何年間も執筆する場を奪われることになった。裕福な兄エドワード（Edward）が妻を失ったことで、やっとジェーンの姉のカッサンドラ（Cassandra）と母の住いとして、チョウトン（Chawton）の或る屋敷を提供してくれたのが晩年で、ここではじめてジェーンは最後の三大名作を書くことになるのであるが、その間に彼女は二度にわたる結婚のチャンスにも、それをものにすることはなく、「愛のない結婚はしない」という信念を通して、現実には行えないことを、小説の想像世界の中で実現することで、満足を得たのである。

他方ドロシーはというと、6歳までに父と母を共に失い、兄のウィリアムとも別れ別れにされ、叔母 Threlkeld の家に預けられ、続いて祖父母の家に預けられて重苦しい喜びのない子ども時代を送る羽目になり、さらにドロシーが16歳の時、母方の叔父ウィリアム・クックソン（William Cookson）がドロシー・クーパー（Dorothy Cowper）と結婚してノーフォーク州のフォーンセット（Forncett）という教区の牧師として赴任することになって、ドロシーはやっと嫌なペンリスの祖父母の家を離れ、牧師館に同居させてもらうことになる。この牧師館でドロシーはクックソン牧師夫人の手助けをして、慈善に精を出す生活を続けていた。そしてクックソン夫人が次々と産む子どもの世話を余儀なくされ、憧れの自由の謳歌（読書や自分の仕事）ができなくなっていった。そうして1792年ドロシーはもう20歳になっていて、まだ結婚もしてはいない。しかも自立して自分のお金を稼ぐこともできない。だが21歳の成人の時までには、何とかして自立したいと思うようになっていた。

さて、ドロシーの人生の中で深く兄のウィリアムと関わりを持つようになるのはここからであり、このエッセイの眼目部分もここからである。兄ウィリアムがドロシーの人生に関わりを持つようになるのは、ウィリアムが16歳の時で、ドロシーが15歳の時、つまり1787年から1789年にかけてのペンリスにおける再会であった。それから1793年6月になって、兄ウィリアムの存在がドロシーの人生の感情面での中心を占める愛情の対象

となった——まさに「恋に落ちた」という言葉通りであった。そしてフランスへの旅から帰ったウィリアムが1790-91年の6週間をドロシーの居るフォーンセットの牧師館に滞在することで、ドロシーの兄を見る眼が変わったのである。

1792年12月、21歳の誕生日を迎え成人となったドロシーは、子どもの頃失った「父の家」の再現を兄ウィリアムとの生活で果たそうとする願望が強くなり、ウィリアムも叔父のクックソン牧師の推薦で牧師職を手に入れる決意をしていたところが、フランスでカトリックの女性アネット・ヴァロン（Annette Vallon）と恋に落ち、娘キャロライン（Caroline）の誕生を見てからの帰国、叔父はウィリアムの牧師職を撤回したので、ドロシーの兄と一緒に家で暮らすという夢は瓦解した。だが失意の只中に在るウィリアムへのドロシーの愛は一段と深さを増し、ドロシーは兄と一緒にいるために、ついにクックソン叔父・叔母と決別することになる。そしてその兄への献身的な愛は、残忍な運命が彼女を打倒してしまうまで、生涯変わることがなく続くことになるのである。

1794年ハリファックス（Halifax）に到着したドロシーは、彼女の育ての親であったThrelkeld叔母が結婚したローソン氏（Rawson）の屋敷で兄ウィリアムと逢い、そこに6週間滞在した。それから二人して遠足に出て、湖水地方のケジック（Keswick）にあるウィリアムの友人レズリー・カルヴァート（Raisley Calvert）の農家ウィンディ・ブラウ（Windy Brow）に長期滞在し、親戚から如何に批判されようともドロシーは、己の感情の正しさを信じて、兄の潔白を弁護し、世間の批判に反逆したのである。こうして兄弟の助けのもとに一緒に暮らすことを夢見ていたドロシーのその夢は、1795年9月までに実現の運びとなった。

これを可能にしたのは、一つには兄の友人レズリー・カルヴァートがウィリアムに900ポンドの遺産を残してくれたことであり、またケンブリッジの友人バジル・モンタギュー（Basil Montagu）から2歳の息子の世話を、年50ポンドでして欲しいと頼まれたこと、さらにはモンタギューの教え子ピニー兄弟（the Pinney Brothers）がウィリアムの詩人としての才能への思い入れから、ドーセットの屋敷を只で貸してくれるという申し出をして

くれたこと等があったからだ。これが広大な屋敷のレースダウン・ロッジ（Racedown Lodge）である。

この頃、つまり 1794 年頃のウィリアムの関心は、自然にではなくて、政治（革命）の方にあった。ドロシー自身も親仏派で、政治的信念は兄と一致してはいたが、彼女の役割はウィリアムを政治への傾斜から守り、詩人としての天職を全うさせることにあった。そして上記のような偶然の幸運が<sup>しゅったい</sup>出来なければ、ドロシーはウィリアムの計画に従って、ロンドンに行き、そこで文筆で生計を立てることになっていたかもしれない。そしてロンドンで文筆で生計を立てようとした他の女性たちの惨めな生活を、ドロシーも味わうことになっていたかもしれない。そしてウィリアムの詩も、ほんの僅かのもので終わっていたかもしれないのだ。

1795 年 9 月 26 日レースダウンに到着。自由生活の実験が始まったのである。だがレースダウンでのウィリアムは、鬱々として楽しまない日々を送っていた。その原因は、生活資金の欠乏であり、アネットへの罪の意識であり、フランスとイギリスの戦争をめぐって、フランスが次第に独裁制に突き進んでいくことに対する批判がウィリアムに生じたことなどであり、ウィリアムは己の人生で何をすべきかの判断に悩んでいたと思われる。そしてドロシーはこの状況をマーシャル夫人（Mrs Marshall）への手紙で、「出口のない冬籠り」（winter prospects without doors）に喩えている。

こうしたウィリアムに詩人としての天職を歩むよう決定づけたのは、ドロシーの自己犠牲による献身であった。これは同時に、ドロシーがウィリアムを我が物とする唯一の手段であったともヴィーヴァーズさんは言う。こうしてドロシーとウィリアムは、いわば、運命共同体となった。

さて愈々ウィリアムがコールリッジ（S.T. Coleridge, 1772-1834）と出逢って、意気投合し、やがて二人してロマン派宣言の詩集『抒情民謡集』（*Lyrical Ballads*, 1798）創作開始となる時がやって来る。1797 年の春にヨークシャーから、やがてウィリアムの妻となるメアリ・ハッチンソン（Mary Hutchinson）が幼馴染のドロシーを尋ねてレースダウンにやって来る。そしてメアリが 6 月 5 日に帰ると、コールリッジが訪ねて来る。そして彼が 7 月のはじめにサマーセット州のネザー・ストーウィー（Nether Stowey）の

家に帰る時に、ウィリアムとドロシーを連れて行く。それほどまでにこの三人は別れ辛くなっていたのである。そしてサマーセットでの毎日の散歩の間に交わされた会話こそは、イギリスロマン派の基礎を築くものとなったのであり、この会話にドロシーも参加していた。

コールリッジとの対話の中で、ウィリアムは、政治革命から自然の愛への神秘的な信仰へと移行して行ったのである。自然から受ける感情を内なる思考で再考して創られた詩のはじめが、“Ruined Cottage”であった。この後ウィリアムとドロシーはもはやレースダウンには戻らずに、サマーセットに落ち着くことになる。1797年7月中旬のことであり、コールリッジの家から僅か3マイルの所に大邸宅オールフォックストン・ハウス（Alfoxton House）を見つけ、年に23ポンドもの家賃を出してまで、ここに滞在することにした。それはコールリッジの傍に居る必要があったからである。そうして『抒情民謡集』の創作が開始されることになった。三人は自らを“the Concern”（三人組）と呼び、一つの愛の共同体を形成して、金に困っている従兄弟のロビンソン・ワーズワス（Robinson Wordsworth）やコールリッジの妻セアラ（Sarah）の存在を無視したのである。

オールフォックストンの住民となったウィリアムとドロシーであるが、フランスとの戦争が近づいてきていることから、二人はフランスのスパイではないかという噂が立った。政府の役人ジェイムズ・ウォルシュ（James Walsh）がやって来て、取り調べを受けるというようなことがあり、二人はコールリッジ共々数年間ドイツに逃れて行く計画を立て、これを実行に移すことになる。

さて三人は連れだってドイツに向かったのであるが、コールリッジはウィリアムとドロシーが二人だけで親密にしているのが気に入らず、すぐに別れてしまった。そしてウィリアムとドロシーは二人して極寒の侘しい田舎町ゴスラー（Goslar）の冬（1798-99）を、「妹」とは愛人の別名と噂のある中で、ひっそりと過ごしたが、ウィリアムはストーヴを前にして、自分の過去へと没入して行き、ゴスラーを去るまでには、『序曲』（*The Prelude*）のはじまりの子ども時代の回想400行を完成させたのである。

ゴスラーでのウィリアムの詩作はこれだけではない。ここでやっとこの

エッセイの眼目である「ルーシー詩群」の創作が登場するのである。筆者はこの詩群が生まれ出る前後のウィリアムとルーシーとの関係をこゝまで必要にかられて、できるだけ簡潔に書いてきたが、こゝからの内容に特に注目してもらいたい。

「ルーシー詩群」はルーシーという可憐な少女、人里離れたところに一人暮らす少女が、ひと目につかぬうちにやがてこの世から消え去ってしまうことへの予兆や、その実現を歌ったものであるが、前者には“Strange Fits of Passion Have I known”が、後者には“She Dwelt Among Untrodden Ways”がある。コールリッジはこの詩のルーシーをドロシーだと思い、ドロシー自身も、アネットの存在を除けば、この兄の病的な感情の出所は自分と兄との関係にあると思っていたとしても不思議はなかったであろう。それはさて置き、女性のしとやかさを美しい花に仮託したウィリアムのルーシー像になって兄に愛されたいというのが、ドロシーの願いであり、ドロシーは兄の理想の女性像に近づくようになろうとしたと思われる。

ヴィーヴァーズさんは、二人がイギリスに帰国する頃までには、二人の愛はそれまで以上に強固なものとなっていた、それは二人だけの孤独が二人の絆を確実なものとしたからだと言い、ウィリアムが自分の理想とする女性を失うのではと心配し始めた理由は定かではないが、ドロシーへの彼の愛と必要性がこのか弱くて、儚いように思える存在、つまりルーシーを窒息死させてしまうのではないかと恐れたからかもしれないし、あるいは彼女が自らの力で、彼とは切り離され独立した人生に逃れ行くのではないかと恐れたからではないかと推測している。

筆者は既に上述したように、ルーシーの死はワーズワスの永遠の探求のしからしむる所だという論をこれまで展開してきたし、それを撤回するつもりはないが、このヴィーヴァーズさんの意見はもっともな推測であり、あるいはそれが真実であるかもしれないとも思う。だが、二人がドイツより帰英してからグラスミア(Grasmere)のダヴ・カテッジ(Dove Cottage)に落ち着き、念願の自分たちの家を持つに至ってから、ドロシーが綴ることになる『グラスミア日記』(*Grasmere Journal*)の内容が、ヴィーヴァーズさんの指摘するような愛の三角関係の病的とさえいえるよ

うな驚くべき内容を含むものであることを考慮に入れば、二人の愛の関係は、ただ単なる兄の妹「喪失」の予兆への不安といった程度のものではなくてくるのではと、危惧するのである。

ではヴィーヴァーズさんの指摘するドロシーの『グラスミア日記』を見よう。

1799年5月初めにドイツでの2か月の滞在を終えて帰英した二人は、その年の末までは友人のメアリ・ハッチンソン一家の住むソックバーンに滞在し、ウィリアムが訪ねて来たコールリッジと共に偶々湖水地方にまで散歩に出た時に見つけたのが、いわゆるダヴ・カテッジであり、ウィリアムとドロシーは1799年12月にそこに移り住むことになる。コールリッジも1800年の末までには近くのケジックの広い館グレタ・ホール（Greta Hall）の一部に住まうことになった。こうしてまた例の三角関係の共同体が再結成された。

さて、ドロシーのグラスミアこそは英国のピクチャレスクの宣伝家ギルピン（Gilpin）の描く光景そのものであり、彼女はよそ者の眼で新鮮な驚きを以って田舎の光景を観察したと、ヴィーヴァーズさんは述べている。そこには彼女の理想とする姿のみを選択し、既に産業革命の余波を蒙っていたであろう谷や丘の様子は描かれてはいない。兄ウィリアムも彼の詩の中では同様の取捨選択をおこなっている。

カンバーランドやウェストモールランドの高地の地勢には、低地方のような大地主が広大な地所を持って中心に居るということはなく、むしろ自立した小地主（小農家）が中心だが、富める者と貧しい者とを区別する資本主義の波が傍まで迫っていた。ドロシーとウィリアムは辛うじてジェントリーとして貧しい生活を送っていた。

だが、生まれ故郷のスティーヴントンを去ってバースに移り住むことを余儀なくされたジェーン・オースティンとは違って、ドロシーはダヴ・カテッジでは自由にものを書くことができた。グラスミアの日記を始めたのは、1800年5月14日からであった。この日はウィリアムが船乗りとなった弟のジョン（John）と共にヨークシャーのハッチンソン家を訪ねていて、留守であったが、日記のはじめには、兄と少しでも別れていると悲しいと

書き付けられており、ドロシーの心は完全に兄ウィリアムと一体化していることが見て取れる。その一節を引用してみよう——別れのキッスをした後、

“...I sate a long time upon a stone at the margin of the lake, and after a flood of tears my heart was easier. The lake looked to me I knew not why dull and melancholy, and the weltering on the shores seemed a heavy sound.”

ウィリアムが帰宅したら見せてやろうと思って日記を書き始めたことを、ドロシーは初めに断っているが、ヴィーヴァーズさんは、これは一緒にいたら口に出して言えることを、書くことによって愛する兄と心の中で繋がる方法であったのだという。だが、ヴィーヴァーズさんは、ドロシーはどのように感情を告白してはいるが（これがいつものやり方）、よく読むとその感情の持ち主の本当の姿は見えないと言い、兄がドロシーを一人残してハッチンソンに逢いに行った時一人残されたドロシーの心の内は、実は何も描かれてはおらず、不明なのだと言うのである。ドロシーはこの頃（つまり兄がメアリ・ハッチンソンと親密の度を増し始めた頃）から、己の感情をストレートに告白するのを躊躇うようになると言うのである。

またヴィーヴァーズさんはこうも指摘している——ドロシーは日記ではウィリアムのフランス人女性アネットからの手紙のことなどなにも言っていないのだが（因みにアネットからのウィリアムへの手紙のことが明らかになったのは、1913年になってからだ）、彼女から手紙が届いた日には、ドロシーは必ず不調を日記で訴えているのである。だが、ドロシーを悩ませていたのは、アネットからの手紙だけではなかった。それは兄の詩作の苦悩を共有していたことだ。ヴィーヴァーズさんは、ドロシーの日記から、ウィリアムが詩“The Pedlar”の創作時に見せた苦悩とその苦悩に対処して、書き換えの度にそれを清書するドロシーの苦悩の跡を、1802年2月2日から始め、5日、6日、9日、10日、14日、16日、28日と辿り、いくら書き換えても完成しない詩に対し、“disaster pedlar”と絶望の言葉を吐き

出す姿を捕らえている。この間ウィリアムは“ugly places”に出かけて行ったとも日記には記されているが、これについてヴィーヴァーズさんはコメントを差し控えている。だが、このことは後程述べる彼女と兄との関係に或る示唆を与えるものとして、見逃しにはできないと筆者は見ている。

ウィリアムの詩作の時の体調はつねに不調であり、それはおそらく「心身症」(psychosomatic)ではないかと言うが、本人を衰弱させるものであると同時に、それを見る者を苦しめるものであった。彼女の日記の平坦で穏やかな描写とは裏腹の、こうした妹の苦悩の実態があったのである。一人の男としての兄への愛と詩人としての兄への愛とがドロシーの内で葛藤していたのである。この『グラスミア日記』は多くのことを語っているとヴィーヴァーズさんは言う——「それはダヴ・カテッジにおける生活の、読む者を揺すぶらずにはおかない記録——辛い仕事と病氣と極端な悲しみの発作（だが十分な説明のない）とによって中断された、不完全な牧歌である」と。

ではもう少し具体的な二人の関係を示唆するところを彼女の日記に辿ってみよう。ウィリアムの結婚に至るまでの間のドロシーの兄への愛の深化過程は、きわめて濃密なものであった。一緒に暮らし始めた初めの一、二年の間は、ドロシーは兄のことをただ“William”とのみ書いていたが、1802年の2月2日には“My William”となり、3月の4日には“my darling”、そして3月17日には“my Beloved”と変化していく。二人だけで話していたり、ただ座っているだけでも、それはもうドロシーにとっては至福の時であった。

それが時には肉体的接触を伴うことがあった。ドロシーはウィリアムが眠りにつくまで、彼女の肩にウィリアムの頭をもたせ掛けさせて、本を読んでやったり、外から帰ってくると、二人で窓の傍に黙って座り、ウィリアムは彼女の肩に手を置いていた。「私たちは深い沈黙と愛の中にいた。至福の時であった」と書いている。また以前から戸外で二人溝などに横たわる癖があったが、これを紳士と淑女がやるのは常軌を逸していた。また再会すると二人はよくキスをする癖が昔からあったが、ドロシーは兄の息と唇の感触を「冷たくて新鮮で、甘美な香りがした」と言い、二人で座っ

て話しながら夜明けを迎えたこともあり、「幸せな時」であったと記している。

またウィリアムが家を空けた時には、ドロシーは自らを慰めるために兄のベッドで眠ったが、「ウィリアムのことで頭が一杯で、よく眠れなかった」とも書いているし、またそのような時には兄の齧り残したリングを大事にとっておいたり、二つの湖の岸を回って、飛び石を渡り、いつも二人が座る場所に腰を掛けて、最愛の人のことで頭を一杯にしたとも言う。これらのことからわかるように、ドロシーは兄への愛をどうしたらよいのか、持て余しておろおろしているといった状態で、それが日記の中にも溢れ出てしまっている。見るのも痛ましい。

著者のヴィーヴァーズさんは、ではドロシーは兄に性的に惹かれていたのかと自らに問いかねながら、ドロシーの生前にウェストモerlandやロンドンで噂になっていた「近親相姦」については懐疑的であるが、ドロシーの兄への愛には、感情も知性も性的喜びも伴っていたと言う。だが、日記の中でのドロシーの性的な関係についての言及は、きわどい。

では兄ウィリアムのドロシーへの愛の方はどうであったのであろうか。これに関してはヴィーヴァーズさんは、詩作に悩むウィリアムがドロシーとの接触を求めて来たという事実を指摘していて、肉体的接触を求めてきたのは、ドロシーではなくて、兄ウィリアムの方であった点を明らかにしている。既に少し言及したが、兄を眠らせるために、自分の肩に兄の頭をもたせ掛けさせて、本を読んでやったり、「絨毯の上で彼を愛撫してやった (petted)」とまで言う。この言葉は今では性的なものを含んでいるが、当時は「甘やかす」(cosseted) の意味で使っているのであろうとヴィーヴァーズさんは言い、ウィリアムがやっと眠りについてくれて、ほっとするドロシーの兄への愛は「特殊な類の愛」(a very special kind of love) だと断言する。

だが問題は、性的な接触を求めていたのはドロシーの方ではなくて、ウィリアムの方であったのであり、これがドロシーを悲しくさせた根本要因だとヴィーヴァーズさんは見る。メアリと結婚したのちのウィリアムは、妻と離れている時に、妻に対して性的欲求の衝動のあることに言及した手

紙を書いているが、同様のことが結婚前のウィリアムにはドロシーに対しであったのではないかとヴィーヴァーズさんは考えている。それほどウィリアムは性的欲求の強い男であったからだ。おまけにウィリアムは無嗅覚症（anosmic）であったという事実を指摘し、近親相姦を避けようとする本能が働くのは嗅覚の働きによると言い、近親者には普通我々は性的欲求を覚えないというのである。これが機能しないとすると、妹ドロシーはヤバイ立場に置かれることになるわけである。

だが、ドロシーの悩みの本質は、兄ウィリアムの性的欲求を満たしてやれないことにあったと同時に、近親相姦の危機を自ら回避する行動をとったのが、ウィリアム自身であった2点をヴィーヴァーズさんは指摘している。1802年3月9日散歩の時にウィリアムはドロシーに、ベン・ジョンソンのオード「森に寄せて」（“To the Forest”）を読み聴かせたことが、ステイーヴン・ジル（Stephen Gill）のワーズワス伝の中で述べられている。この詩には清純な愛と盲目の愛とが区別されており、「罪」（guilt）はいくら隠しても必ず現れるものであり、我々の衝動を抑制することこそ最大の安全であると説いた詩であった。これが二人の恋人にとっては、悲しい愛の歌となったのである。

こうしてドロシーとウィリアムに肉体の交わりを止めさせることになったと、ヴィーヴァーズさんは結論する。

だがそれで二人の親密な関係が終焉したわけではない。つぎにドロシーが取った行動は、彼女自身が兄をメアリ・ハッチンソンと結婚させようと積極的に働きかけたことである。妹に向けられていた性的衝動を「罪」と思うウィリアムの意識を解消するには、ドロシーが自己犠牲を承知で、兄を早くメアリと結婚させることであった。30歳になったドロシーはきっぱりと結婚を諦めて、兄に奉仕することを選んだのである。

ドロシーは兄がメアリに逢いに出かけて行くのを元気づけ、彼の帰りを大変喜んだのは確かであるが、その翌日（1802年4月14日）には、例の如くドロシーは変調をきたしたのである。だが、ウィリアムは今回の旅で書いた詩を一篇ドロシーにプレゼントした。それは“Among all Lovely Things my Love had been”という題（後ほど“The Glow-Worm”で、二

人のサマーセット滞在時に、ドロシーが蛍を見たことがないというので、ウィリアムが一匹の蛍を持ち帰って、庭に放ち彼女に見せてやろうとしたことを歌ったものだが、この兄の愛情深い行為を思い起こさせるものであった。こうしてウィリアムはまだドロシーに対し愛のあることを示して、彼女を安心させようとした。

この詩の中でドロシー、つまり“my Love”は、『序曲』におけると同様“Emma”と呼ばれているが、ドロシーはこの“Emma”を“Mary”に書き換えたコピーを作ってメアリに送ったのである。ウィリアムは後にそれをまたドロシーを指す“Lucy”へと変更した。

ここには既にウィリアムとメアリの結婚生活の中に未婚の妹が介入して、三角関係が成り立つことを示唆するものが含まれていた。だがこのような奇妙な結婚生活の様式は、ジョージア朝にあっては異常なことではなかったという。だが、こうした生活の中でドロシーが精神的圧迫を蒙らずにはすまないのは自明のことであった。だがその前にウィリアムの結婚式の前日に、彼が妹ドロシーと交わした異常な誓いのことに触れなければならぬ。

1802年10月4日の結婚式に関するドロシーの描写は異常なものだったの  
で、後程彼女自身あるいは日記の最初の編者が削除したが、後に復元された箇所である。復元された箇所にはこのようなことが書いてあった——結婚式に出かけていく朝別れ際に、ドロシーは「祝福を込めて結婚指輪を兄に渡したが、その指輪は私が昨夜一晩中自らの指に嵌めていたものであり、それを指から抜いて兄に渡した。すると兄は今一度それを私の指に嵌めて、私を熱烈に祝福した」。

それだけではない。兄が教会に出かけていった後、ドロシーはできる限りおとなしくしていたが、二人の男がやって来て式が終わったと告げると、ドロシーはもはや堪らずにベッドに身を投げ出し、何も見聞きしないで黙って横たわっていた。召使いが二人が帰ってくることを伝えたと、ドロシーはベッドから飛び起きて、あらん限りの力で駆けだし、愛するウィリアムを見ると、彼の胸に身を投げかけた。兄とジョン・ハッチンソンは彼女を家に連れ帰り、そこでドロシーは愛しいメアリを迎えた、と言うので

ある。

自らが管理すべきはずの結婚指輪をドロシーに委ねていたのは異常であり、第一に結婚相手のメアリに渡すべきはずの指輪をひとまずドロシーに渡し、後に当の本人に渡したことも異常。これではウィリアムはドロシーを自分の妻とすることの儀式を先に済ませたことになる。そしてドロシーは一人寝室にいて、結婚式の物真似をしていたということになる。そしてこれをそう仕向けたのは、他ならぬウィリアム自身であったとヴィーヴァーズさんは断言する。

ウィリアムの結婚後のドロシーに起こった変化についても、簡潔に纏めておこう。ある程度予測はできたことではあったが、正式な夫婦生活の中に第三者が介入する家庭生活は、以前のようにドロシーの筆の流れをスムーズにはさせることがなくなって行った。それに間もなくウィリアムには長男ジョン（Johnny）が生まれ、ドロシーの愛情はこの赤ん坊に注がれることになる。そしてコールリッジとの三人組の共同体も復活し、ドロシーはウィリアムとコールリッジの三人でスコットランドの旅に上がる。この時もドイツ旅行同様に、ウィリアムとドロシーが二人きりでいるので、結局コールリッジは2週間で二人と別れてしまう。こうして結婚前日にドロシーにしたウィリアムの約束（誓い）が今果たされたのであるが、これを続けるのは、しかし、次第に難しくなっていく。

しかも、次々とメアリとの間に子どもが生まれていったことも手伝って、結婚当初はそれほどの愛をメアリに感じてはいなかったウィリアムが、旅先からの妻への手紙では、その手紙をドロシーには見せられないような親密な内容を認めるようになっていった。つまり己の子どもの生みの親であるばかりか、それまでには妹ドロシーに拒否されてきた性的満足を与えてくれる妻の存在が、ウィリアムにはなくてはならぬものに質的变化をきたし、妻への愛情が濃厚になっていったのである。

他方3人の小さな孫に、メアリの妹セアラ（Sara）の同居で込み合ってしまったダヴ・カテッジを、ドロシーたちは立ち去らねばならなくなった。1808年の夏にはダヴ・カテッジから一マイルほど離れた新築の広い屋敷アラン・バンク（Allan Bank）に引っ越すが、ウィリアムが詩の出版を躊躇

うので、家賃の工面にドロシーは困惑をきたした。今やドロシー自身自らの著作もできなくなり、これまでは生きる目標にしてきた兄の詩についての意見を述べたり、その詩のインスピレーションの源となるスケッチ（日記）を書くことも止めてしまっていた。家の日常生活と子どもの世話で手一杯になったからである。

作家としての生活では、1809年がドロシーとジェーン・オースティンが入れ替わった年となった——ドロシーは以上のようなわけで筆を折り、ジェーンはチョートンに終の棲家を見つけ、安定して執筆を再開することができたからである。抑制の効いた生き方をしてきたジェーンは、胸に秘めたものを自らの小説空間、想像的世界において開放することができるようになったのだ。他方、1809年、ドロシーは37歳になっており、彼女を観察するドウ・クインシー（De Quincy, 1785-1859）には、若き日のドロシーの信念であった自己主張表現が、どこか当惑と内的葛藤を見せて、己の感情の源を探ることを拒否してきた姿は、痛ましく見えた。

ドロシーは83歳まで生きたが、終の棲家となったライダル・マウント（Rydal Mount）の二階の部屋に閉じ込められて、20年間は完全に心が壊れた状態になっていたと言う。最近の研究では、ドロシーは痴呆（dementia）ではなくて、激しいうつ病（severe depression）であったと言われる。

作者のヴィーヴァーズさんはこの「うつ病」の原因を明白に断定してはいないが、彼女が本書で辿ってきたドロシーの生き方を見ると、兄ウィリアムと一体化した己の存在意義が、ウィリアムのメアリとの結婚生活と子どもの誕生による歳月を経て、兄夫婦が親密の度を増していく中で、一人除外されていく者としての寂しさやつねに葛藤を余儀なくされた結果、歳がいき肉体が衰え、兄の子どもたちも大きくなっていき、家族のためのみ身を粉にして奉仕してきた女の心の支えが消失していったことが、ドロシーに激しいうつ病を発生させることになったと思われる。

筆者はこのエッセイでワーズワスの「ルーシー詩群」に対するこれまで筆者が折に触れて述べて来た事の外に、新たな観点からの解釈が可能ではないかということで、メアリアン・ヴィーヴァーズさんの本書におけるドロシーとウィリアムの関係についての画期的な解釈の提示に関心を抱いて、

そのあらましを述べてきたのであるが、最初の予期に反して大層長くなってしまった。筆者が本書から思いついた新たな角度からの「ルーシー詩群」の解釈とは次のようなものである。

ワーズワスがドロシーの存在を詩の中ではルーシーに仮託して、その少女の美しく儚い存在をことさらに強調したのは、筆者の持説である詩人の〈時と永遠〉の課題がその基盤にあるということの他に、ドロシーを悩ませた彼の強烈な性的欲求もルーシーの存在を希薄にする要因になったのではないかという推論である。結婚までのワーズワスは己の性的欲求を妹との関係では満たせないために、“ugly places”に出かけることがあったとドロシーは証言しているが、こうした強い性的欲求のせいで、妹と一緒に暮らす前でさえ、ワーズワスはフランスで子どもを作ったという実績がある。

つまり、筆者が言いたいのは、ドロシーに性的欲求を求めることを避けるために、ワーズワスは彼女を性の感じられない少女ルーシーに仕立て上げてしまったという面があるのではないかということである。筆者がヴィーヴァーズさんの本書を読みながら思い出していたのは、ジョン・ラスキン (John Ruskin, 1819-1900) のことである。彼の場合は、大人になった女には嫌悪感を抱くので、性を持たない少女を自分の理想像として溺愛したわけであるが、ワーズワスはラスキンとは別の意味で、性を持たない少女像に肉体を持つ愛しい妹を変身させてしまうことで、自らと妹を、ベン・ジョンソンの言う「罪」から守ろうとしたのではないかと思うのである。

最後にもう一言付け加えておきたい。これまでにこのような説を述べたワーズワス研究者が皆無というわけではない。F.W. Bateson の所謂「センセーショナルな近親相姦願望とその心理的埋葬（ルーシー殺し）理論」(the sensational incest wish and the psychic burial theory) というものであるが、これはこれまで承認を得ないできた理論であった。だが、上述のようなヴィーヴァーズさんの説くウィリアムとドロシーの間に生じた事実関係を基にして再考する時、この理論が新たに脚光を浴びる余地があるのではないかと思われる。

(Oct.11, 2017, 改定 July 16, 2018)

## 参考文献

- 河村民部著『山頂に向かう想像力——西欧文学と日本文学の自然観——』（英宝社、1996）
- 『詩から小説へ——ワーズワスとロマン派の末裔——』（英宝社、2008）
- 『ワーズワス『抒情民謡集』<sup>リリカル・バラッズ</sup>再読』（英宝社、2014）
- 『「ロマン派の子ども像——ブレイクとワーズワス——」松村昌家編『子どものイメージ——19世紀英米文学に見る子どもたち——』（英宝社、1992）
- Bateson, F.W. *Wordsworth: A Re-interpretation*. London: Longmans, 1954.
- Gill, Stephen. *William Wordsworth: A Life*. Oxford: Clarendon Press, 1989.
- Johnson, Ben. “The Forest” (1616), *Poetical Works of Ben Johnson*. Edited by Robert Bell. London: Griffin, Bohn and Company, 1861.
- Veevers, Marian. *Jane & Dorothy: A Tale of Sense and Sensibility*. Sandstone Press, 2017.
- Wordsworth, Dorothy. *The Grasmere and Alfoxden Journals*. Edited by Mary Moorman. *Journals of Dorothy Wordsworth*. Oxford, 1972.
- . *The Grasmere and Alfoxden Journals* (Oxford World's Classics). Edited with Intro. & Notes by Pamela A. Woof, Oxford University Press, 2008.
- Wordsworth, William. *Lyrical Ballads* (1798). Edited by Earnest De Selincourt. *The Poetical Works William Wordsworth*, I. Oxford University Press, 1940.
- . *Lyrical Ballads*. Edited by Earnest De Selincourt. *The Poetical Works William Wordsworth*, II. Oxford University Press, 1944.
- . *Lyrical Ballads*. Edited by Earnest De Selincourt. *The Poetical Works William Wordsworth*, V. Oxford University Press, 1949.
- . *The Prelude or Growth of a Poet's Mind* (1805). Edited by Earnest De Selincourt. 2<sup>nd</sup> ed. 1926. Oxford: Clarendon Press, Revised by Helen Darbishire, Oxford, 1959.
- . “Ruined Cottage” [The Pedlar], *The Excursion* (1814). *The Wordsworth's Poetical Works*, Vol.V. Edited by Earnest De Selincourt and Helen Darbishire. Oxford: Clarendon Press, 1966.
- . “Among all Lovely Things my Love had been” [The Glow-Worm], *William Wordsworth: The Poems* (volume one). Edited by John O. Hayden. New Haven and London: Yale University Press, 1981.